

# 白らの哲学をもつて 現代の課題に取り組む 人材を育成したい

東洋大学 学長 竹村牧男

取材文／堀水潤 撮影／中岡邦夫



【学長プロフィール】1948年生まれ。東京大学人文科学研究科博士課程中退。文化庁専門職員、三重大学人文学部助教授、筑波大学教授などを経て、2002年東洋大学文学部教授。文学部長などを経て09年より現職。博士(文学)。専門は仏教学、日本仏教。

【大学プロフィール】1887年私立哲学館創立。文・経済・経営・法・社会学部(白山キャンパス)、国際地域学部(白山第2キャンパス)、生命科学部(板倉キャンパス)、ライフデザイン学部(朝霞キャンパス)、理工・総合情報学部(川越キャンパス)の10学部44学科体制。

「諸学の基礎は哲学にあり」。創立者井上田了博士がそう示したとおり、本学は1887年の創立当初より「哲学」を教育の根幹に据えてきました。当時、実学中心の大学が多かったなか、大変ユニークな教育の理念といえますが、それは現代においてこそ、大きな意味をもっていると感じています。

問題のありかを発見し、体系的・論理的に考え、解決する力を養うこと。これは、知識を教えることに偏重した従来の教育の反省に立ち、今日の大学に求められる眼目の一つでしょう。

また、海図なき時代といわれ、世の中を覆う二元的な価値観などない昨今、一人ひとりが「ものの見方・考え方」を築くことも求められています。相手の考えを理解し、尊重したうえで、しかし、確固たる自分の考えをもつ必要があるということです。

哲学の訓練はまさに、こうしたことに役立つのです。哲学教育とは哲学者の思想の受け売りをするものではありません。井上田了博士は思想の練磨の重要性を述べましたが、哲学教育とは、わかりやすくいえば考える力を養うということなのです。

ここで重要なのは、考える力を養う

ことが哲学教育なのですから、各学部学科におけるどんな科目にも導入可能だということです。たとえば、生命科学部であれ、理工学部であれ、自分が学んでいる学問が、この時代の社会状況のなかで、また自分自身にとってどういう意味をもつのかを深く理解していくことも、哲学の一環です。そうしたことで、大学での学習・研究に二層の深みが増すことでしよう。

一年次からの基礎ゼミナールや、全学共通の総合科目、さらには課外講座などを通して、哲学教育あるいは自校教育に力を入れている本学ですが、今後、それぞれの学問分野にふさわしい形で哲学関連の科目をカリキュラムに組み込んでいきたいとも考えています。

本学は2009年度、工学部の理工学部への改組、総合情報学部の新設、生命科学部の2学科新設などの教学改革を行いました。社会が課題とする新たな学問分野をカバーしながら、真の総合大学になるための大きな改革といえます。今後は教育力、研究力の質をより向上させることに力を注ぎます。まずは2012年の創立125周年に向け、全力を投入したいと思っています。